HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 江戸時代の易學に關する研究［論文内容及び審査の要旨］ |
| Author(s) | 廖, 海華 |
| Degree Grantor | 北海道大学 |
| Degree Name | 博士(文学) |
| Dissertation Number | 甲第13413号 |
| Issue Date | 2019-03-25 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/74442 |
| Rights(URL) | https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/ |
| Type | doctoral thesis |
| File Information | Haihua_Liao_abstract.pdf, 論文内容の要旨 |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　廖　　海 華

学位論文題名

江戸時代の易學に關する研究

**・本論文の観点と方法**

本論文では、江戸時代の思想の主流が朱子学であり、江戸の易学史においても、朱子易学の継承とその反動との二側面からなると考え、代表的な易学者を取り上げ、その易学解釈に関わる稿本を中心に調査することによって、朱子易学の受容の様相や、それへの批判的解釈と独自の易学思想の形成過程とを、具体的に実証的に分析し考察し明らかにしたものである。主に、朱子易学の継承的保守的な受容を代表する林鵞峰、反動的批判的な受容の古学派を代表する伊藤東涯、また別様の反動的な内容を示す国学派を代表する平田篤胤を、取り上げて分析・考察の俎上にのせて、『易』解釈とその思考法の形成過程を辿り、江戸時代の易学の特徴を整理するのである。

**・本論文の内容**

序論では、江戸時代の易学に関する先行研究を分類して、その内容と特色とを紹介し、江戸時代の易学史は朱子易学の受容とその反動との二側面からなるという観点を示し、本研究の目的と方法とを説明している。

第一章「林家の易學」では、林羅山・鵞峰父子の易学著作を中心に検討する。羅山は程伊川の『易傳』（以下「程傳」と略称）・朱子の『周易本義』（以下「朱義」と略称）について講義をしたことがあるが、その記録が火災で焼失した。息子の鵞峰は、易について十種類以上の著作（稿本）を残して、現在、内閣文庫に所蔵されている。その序文・跋文などによれば、鵞峰は、程傳・朱義両方を尊重しながらも、両者の区別にも十分配慮して、まず朱子の著作（『易學啓蒙』と『本義』）について講義し、それが終わってから程傳を講義した。そして、明朝や清朝の儒者の著作を意識的に収集して、積極的に自身の著作に取り入れている。また、その著作には、父羅山の神儒一致の思想を受けて、朱子の先天易学によって日本神道を解釈する試みが見えることも指摘している。

第二章から第五章までは、伊藤東涯の易学著作を中心として研究を進めている。東涯は『周易』を先秦時代の一文献として、その内容や構成を文献学的方法によって冷静に分析している。その結果、『周易』と十翼との異質性が見出され、易学の神秘性が排斥されている。

第二章「伊藤東涯における程朱卦變説の受容と批判―竝びに程伊川の卦變説」では、『周易』の六十四卦の変化に関する学説である「卦変説」に着目し、易学解釈における一つの重要な概念である「卦変」の意味と原理に関する、各学者の理解の仕方を比較研究する。その分析を通して、東涯が程伊川と朱熹の学説を受容しながらも、その上に自分の独特な易学思想を考案している経緯が具体的に明らかにされている。また、これまでやや誤解されていた程伊川の卦変説についても、その仕組みを正確に示すことに成功している。

第三章「伊藤東涯の卦變説―その早年と晩年との差異」では、東涯の卦変説の変遷（学説内容の変化）について考察している。東涯の易学には、早年から晩年まで変化してゆく所がある。卦変説はその典型である。東涯の稿本を調査し、その学説内容の変化を検討することを通して、東涯が早年から晩年まで卦変説を何度も考え直し、自分の見解を修正し補足している姿勢が十分にうかがえ、最終的にその卦変説の原則が、東涯において厳密に守られていることを明かにした。

第四章「伊藤東涯の『周易傳義考異』について」は、東涯易学の全体像を探求する試みである。東涯の易学著作には、公式的著作の『周易經翼通解』（以下『通解』と略称）と非公式な『周易傳義考異』（以下『考異』と略称）とがある。まず『考異』の形成過程について、天理図書館での調

査に基づき文献学的諸問題を論じ、その性質および資料の信頼性を探求した結果、『考異』は、東涯手沢本『易經集註』にある東涯の書入れを、息子の東所などが集めてできたものであることを解明した。その各条の執筆時間は、東涯の早年から晩年までの四十年間に亘っている。時間的に言えば、『易經集註』にある書入れのほとんどは、『通解』ができる前のものであり、『通解』を著すための準備と見てよい。その上で、『考異』と『通解』との関係を詳しく検討すると、前者は後者の基礎資料の集成であるということが判明する。その内容は、程伊川『易傳』と朱熹『本義』とに対する分析と批評の集積である。東涯易学の根本は、このような程朱易学に対する取捨選択的な分析にある。『通解』にはただ簡略にその結論のみが示されるが、『考異』にはその結論に到る詳しい論理過程が説明されている。それ故、『考異』を参照しなければ、『通解』の結論的な見解の背後にある、程傳・朱義を分析し取捨した東涯の思索過程は分からないのである。東涯はまた、程朱易学を分析しながら独自の易学解釈を形成したが、その『周易』に対する見方は程朱のそれとは大いに異なるものとなったことも、本章では指摘されている。

第五章「易學思想の變化―古學から國學へ」では、江戸前期から後期までの易学思想の変化と展開を探求する。前の各章で検討した易学著作は、江戸時代前期のものである。江戸時代後期の易学思想において注意すべきは、儒学以外の分野、特に国学の分野で、易学著作が多く現れたことである。その代表例として、平田篤胤とその弟子たちの易学著作が挙げられる。しかし、平田篤胤の易学著作は、伊藤東涯の著作を大量に引用している。つまり、東涯と篤胤との関連は、江戸前期の易学からどのように後期のそれに変化してゆくか、という問題に繋がっている。本章では、東涯易学の影響に注目して、まず東涯と徂徠とを比較し、そして東涯と篤胤とを比較した。このような比較研究を通して、江戸易学思想の変遷の一斑を究明した。

第六章「平田篤胤の易學」では、篤胤の易学著作『太昊古易傳』の論理構造を検討している。篤胤の易学は、伏羲易の復元と文王易の批判との二点に要約できる。篤胤の皇国中心主義的な古史観においては、大国主命という神が中国に行って、伏羲氏と呼ばれ、易を創造したのである。そして、彼は現存の文献を駆使してその伏羲易を復元しようとした。この復元作業を完成するために、様々な思想的学術的な営為を必要とした。そもそも朱子学においては伏羲易と文王易との区別が説かれ、伏羲も文王も聖人であるので、先天易卦と後天易卦とは共に聖人の作として尊崇される。しかし篤胤は、伏羲易を唯一の真理とし、これによって文王易を批判する。本章では、伏羲易と深く関わる河図洛書・八卦方位・筮法などの各方面に関する篤胤の観点を明らかにした上で、伏羲易復元に見える篤胤の独特な易学観とその理論の一貫性とを論述している。

第七章「平田易學と清朝考證學」では、平田易学の中核について探求している。前章で検討した『太昊古易傳』の論理構造は、きわめて複雑なものである。しかし、これは篤胤の易学の最初の姿ではなく、十数年に亘って何度も修正された結果である。本章では、平田易学の初期の姿を知るために、国立歴史民俗博物館所蔵の篤胤の草稿を基本資料として、平田易学の中核が文字学であるという事実を明らかにした。そして、平田易学における清朝考証学の影響および狩谷棭斎など考証学者との交流の実態についても、その一斑を具体的実証的に明らかにしている。